

戦跡を歩く13

沖縄戦終結から74年を迎え、戦争体験者が少なくなるなか、その大切な記憶を引き継ぐため、教育委員会では体験の聞き取りと記録を行っています。

シリーズ13回目の今回は、終戦当時17歳だった喜屋武の女性のお話を紹介します。戦時下をたくましく生き抜いた若者の体験談に耳を傾けてみましょう。



近づく戦

うちは父と祖母と私の3人家族。私が喜屋武尋常高等小学校を卒業するころには戦(いくさ)が近づいてきて、父の畑を手伝うひまもなく、壕を掘る作業に使われた。父は避難先を探して、東辺名の方のタクンアナー(タコの穴)という場所で壕を見つけてくれた。小さな自然壕だったけれど、父と私でハンマーを使って入口を広げると、人がたくさん入れるようになったよ。父はその後、「国のため」と自ら防衛隊に行ってしまった。

タクンアナーの壕での生活

空襲が始まると、私は祖母を家からオーダー(もっこ)で運んで、この壕に逃げようになった。空襲が激しくなつてからは、壕で祖母や親戚と暮らして、食事の準備や水汲みのために喜屋武に戻るようになった。

水は喜屋武の共同製糖工場にあるタンクから汲んだけれど、死体が浮いていたこともあった。それでも水がないと生活できないから、かきわけてでも汲んだよ。

ある夜、喜屋武村役場の人が壕に来て、弾薬を運ぶ仕事をするように言われた。「そんな重たいものを持てません」と答えたけれど、「行かなければ、どうなるかわからない」と脅かされたから、私は親戚のおばさんと、弾薬が入った箱を与座岳まで背負って運んだ。落とすと爆発すると言われて、帰りは照明弾に照らされて。とても怖かったよ。

それなのに何日か後には、今度は福地の壕にいる兵隊に米俵を運べと言われた。「なんでうちばかり、あなたたちがやりなさい!」と怒ったけれど、「みんなにやつてもらっていることだから」と説明された。仕方なく、またおばさんと作業に向かうとうすると、おばさんは

私に「袋を持ってきて」と言うわけ。不思議に思いながら持っていくと、おばさんは俵に穴を開けて、こぼれた米を私が持ってきた袋に移すんだよ。「こうすれば俵が軽くなる。袋の米は私たちで食べよう」と笑うから、私は感心したよ。だけど、おばさんと福地に行ったら、届けた先の兵隊に俵の軽さを怪しまれてね。私はとっさに「俵がもともと小さいから軽いんです」と言い張って、無事に帰ることができた。おばさんからは、「いざとなると何とでも言う人だ」と、今度はこつちが感心されてね。

壕での生活が続く中、5月の終わりが6月の初めごろ、祖母が亡くなった。体の限界だったんじゃないかね。それからすぐ、友軍に壕を追い出されたんだよ。民間人に変装した兵隊が、朝鮮の女の人を連れて現れて、私たちに出て行けと迫った。鉄砲を突き付けられた私たちは、生活用品も奪わ

れて、新しい避難先を探すしかなかった。

亡くなった祖母はまだそのままだったからね。壕から出して、近くの畑に埋めて、「私は行かなきゃいけないから、ここで安らかに眠ってね」と声をかけた。

喜屋武岬へ、そして捕虜に

岬の下にある壕には、たくさんの方がいて私たちを迎えてくれた。でも、この壕は海からよく見えて不安だったから、私たちはその壕の近くの、木がたくさん生えた岩山に隠れることにした。食べ物はなく、水

だけ飲んで過ごした。

ここでは忘れられないできごとがある。親戚と水汲みに出た日、1人の兵隊さんに出会った。ひどい火傷で息も絶え絶えに、「水をください」と言った。急いで水を汲んで戻った時には、兵隊さんは亡くなっていた。私たちはその人の口や体に水をかけてあげた。可愛そうで何度も泣いたよ。

そこで1週間くらい過ごしたある日、二世兵の「デテコイデテコイ」という声が聞こえて、相当参っていた私たちは捕虜になることにした。その時、余所から逃げてきたおじいさんが、私に

「降参するには若い方がいいから、あんたが行きなさい」と言った。白旗の代わりの布をくれたけれど、私は怖くてたまらない。「殺されませんか?」「大丈夫」「じゃあ、あなたが行ってください!」「若い人の仕事だから」と、結局私が先頭に立って、茂みを出て捕虜になった。

捕まった後、私と何人かの女性が、男性とは分けられて別の場所に連れて行かれると、そこにたくさん米兵が集まってきた。一緒にいる人たちは怖くて動けない様子だったから、私がつさに、手渡された缶詰を米兵に投げつけて、その隙に

みんなと一緒に逃げた。逃げたら学校の裏に出てね、捕虜になった人がたくさんいてホッとしたよ。

故郷に帰る

捕虜になった私たちは、豊見城の伊良波、金武の古知屋、糸満の名城と、収容所を転々とした。古知屋では他の捕虜の食事を作って、名城では芋掘りの仕事をしていた。やっとの思いで喜屋武に帰ると、私たちの家があった場所にはもうコムカヤー(戦地復興のために米軍の指示で建てられた、統一規格の簡素な家)が

建てられていて、すぐに住むことができたよ。

戦争の間に、私のお父さんも、いとこのおねえさんも、弾にあたって亡くなった。最近、亡くなった人のことを夢に見るよ。なんでこんな夢を見るのかと考えてね。これは体験を歴史に残さないといけないと思っ

て、こうして話したわけ。

人物紹介



とくむら 徳村 ノブさん(91歳)

1928(昭和3)年生まれ。喜屋武出身で戦後も地元で暮らし、踊りを趣味にしながら夫とともに建設業を営んだ。現在は玄孫(やしやご)にまで恵まれ、家族にも自身の戦争体験を語り伝えている。

戦跡紹介



タクンアナーの壕

沖縄戦時、喜屋武では32人の人が避難したという自然壕。現在は整地され、かつての地形は失われている。タクンアナー(タコの穴)は喜屋武と東辺名の境界付近の地名で、昔、東辺名の人



共同製糖工場跡

1941(昭和16)年、現在喜屋武郵便局と徳村商店がある場所に、蒸気機関を利用した共同製糖工場が建てられた。建物は瓦葺きで、大きな水タンクと高さ約18mの煙突があったが、沖縄戦で破壊された。